

王女は、「この雪のように白く、この血のように赤く、この窓わくのように黒い髪の子どもがいたらいいのに」と思いました。

それからまもなく、王女は女の子を生みました。その子は雪のように白く、血のように赤く、黒檀のように黒い髪をしていたので、白雪姫と名づけられました。

主人公の姿かたちの描写はこれですべてです。あとは、鏡が女王に向かって、「白雪姫は、あなたより千倍も美しい」と告げる場面が何度も出てきます。

安房直子「緑のスキップ」

『きつねの窓』安房直子作／ポプラ社刊

みみずくは、大きな目玉を、ぴかぴかさせて、桜の木のでっぺんにとまっています。

遠い山には、ほそい三日月がかかっています。南風が、ごうごうとうたいながら、その三日月を、ふきとばそうとしていました。そのたびに、みみずくは、

「そつと吹け、そつと吹け。」
と、いうのです。

みみずくは番兵でした。

花ぎかりの桜林に、あやしい者がはいりこまないように、毎夜毎夜、見はりをしているのです。もしも、だれかがしのびこんで、林の中を、ちよつとでものぞきこもうとしたら、すぐにとびかかるつもりでした。そのために、つめも、くちばしも、よくみかいていました。それほど、桜の花は、美しかったのです。

林いちめん、まるで、うすもも色の雲につつまれたようでした。その下で目をつぶれば、花の歌声が、ごおつと、わきあがってきました。

そればかりではありません。

満開の桜の下に、みみずくは、あるとき、はっきりと見たのでした。きれいな女の子が、ちんまりすわっているのを。黒い髪の毛が、さらさらと、ゆれているのを。

その子はうすいさくら色の着物をいく枚もかさねてきていました。

「あんただれだい。」

高い枝の上から、みみずくが、いきなり声をかけたら、その子は、上をむいて、
「あたし、花かげちゃん。」

と、答えました。ほころんだ口もとに、まっ白い歯がひかりました。その笑顔が、とてもあどけなかったので、みみずくはすっかりうれしくなって、

「そう、花かげちゃんっていうの……。」と、くりかえしました。そして、これは、たしかに、桜の精だと思ったのでした。

女の子の描写は……の部分だけですが、桜林の情景描写の中でも女の子をイメージさせています。

冒頭でふたりの男たちの描写があります。ここで紹介するのはそのうちのひとりの部分ですが、もうひとりも詳細に描かれます。ふたりには、当然ですが、姿かたち個性があります。

もしこの二人が、ほかならぬこの瞬間いかなる点で自分たちの姿が人目をひいたかをたがいに知ったとしたら、二人は自分たちをペテルブルグ・ワルシャワ鉄道の三等車に向いあわせにすわらせた運命の偶然に、むろん、びっくりしたにもがいない。一人はあまり背の高くない、二十七歳ばかりの青年であり、髪はほとんど真っ黒といってもいいほどの縮れ毛で、灰色の瞳は小さかったが、火のように燃えていた。鼻は低くて、平べったく、顔は頬骨がとびだしてお書き、薄い唇はたえずなんとなく不遜な、人をばかにしたような、いや、毒を含んでいるとさえ思われるような薄笑いを浮べていた。しかし、その額は秀でて美しく整い、下品に発達した顔の下半分を補っていた。この顔のなかでとくに目だっているのは、その死人のように蒼ざめた肌の色で、それはこの青年のかなりがっちりした体格に似合わぬ憔悴しきった感じを体つき全体に与えていた。が、それと同時に、その人を食ったような、厚かましい薄笑い、いや、みずから悦に入っているような鋭い眼差しとはまるでそぐわない、悩ましいまでに情熱的なものも感じさせた。彼はゆったりした黒い羊皮の外套を暖かそうに着こんでいたので、昨夜の寒さにも凍えなかったが、向いの客はどうやら思いもかけなかったらしい十一月のロシアの湿っぽい夜の冷気を、思う存分、その震える背中で耐えしのばねばならなかったようである。